

女子傍尿道腫瘍の2例

国立熱海病院泌尿器科 (医長：井田時雄博士)

森 山 正 敏
北 島 直 登
井 田 時 雄PARAURETHRAL TUMOR IN FEMALES:
REPORT OF TWO CASES

Masatoshi MORIYAMA, Naoto KITAJIMA and Tokio IDA

From the Department of Urology, Atami National Hospital (Chief: T. Ida, M. D.)

Two cases of female paraurethral tumor were herein reported. The first case was a 53-year-old house wife with a complaint of genital bleeding. Local findings revealed a walnut-sized and elastic hard tumor on the posterior wall of the urethra to the vestibule of the vagina. The tumor, measuring 3.7×2.3 cm, was removed. Histological diagnosis was compatible with benign leiomyoma.

The second case was a 24-year-old unmarried woman. She was admitted to our hospital with the chief complaint of a mass on the external genitalia. The removed mass was solid and 4.5×3 cm in size. Histological diagnosis was fibroma.

The 69 cases including our cases, compiled from the Japanese literature, were reviewed and some discussion was done.

緒 言

非上皮性女子良性尿道腫瘍は比較的まれな疾患であり、尿道後壁、尿道膈中隔部、膈前壁に発生した場合は原発部位の判定が困難であることが多く、その名称も尿道膈中隔部腫瘍、膈（壁）腫瘍などと報告者により異なっている。

われわれは武本ら¹⁾にしたがい女子傍尿道腫瘍とした。

最近われわれは傍尿道腫瘍の2例を経験したので、症例を報告するとともに若干の文献的考察を述べる。

症 例

症例1. 53歳、主婦、2女の母。

初診. 1977年5月17日。

主訴. 性器出血。

家族歴. 特記すべきことなし。

既往歴. 特記すべきことなし。

現病歴. 2・3年前に外陰瘙痒部感あるも放置。1977

年5月1日暗赤色の出血を少量認め当院婦人科を受診。カルンクルス疑にて当科を紹介される。排尿状態には異常を認めない。精査治療目的にて1977年6月1日国立熱海病院泌尿器科入院。入院時現症。体格栄養中等度、一般状態良好である。胸腹部に異常所見なし。局所所見では尿道後壁から膈前庭部にかけてクルミ大の比較的硬い腫瘍が存在し、可動性は良好である。外尿道口は腫瘍により上方へ圧排されているがネラトンカテーテルは外尿道口より容易に膀胱内に挿入可能であった。

一般検査成績. 血圧: 120/70 mmHg. 血液所見: 赤血球数 $366 \times 10^4/\text{mm}^3$, 血色素量 11.2 g/dl, ヘマトクリット 36%, 白血球数 $3800/\text{mm}^3$. 血液生化学: 血清総蛋白量 6.4 g/dl, BUN 12.1 mg/dl, クレアチニン 0.74 mg/dl, Na 142 mEq/L, K 4.2 mEq/L, Cl 102 mEq/L, GOT 14単位, GPT 15単位. 腎機能検査: 24時間内因性クレアチニクリアランス 150.5 L/day . 尿所見: 糖 (-), 蛋白 (-), 赤血球 0~1/每視野, 白血球 3~4/每視野, 上皮細胞 0~1/每視野, 円柱

(一), 細菌(卅), 胸部 X 線, 心電図に異常所見なし.

X 線所見. IVP により異常所見なく, urethrography においても前部尿道の前傾がみられる以外異常を認めない.

手術所見. 1977年6月9日腰椎麻酔下に腫瘍摘出術を施行した. バルンカテーテルを留置ののち外尿道口より約 1 cm 膺よりに約 3 cm の横切開を加えて腫瘍の剝離をすすめた. 腫瘍は被膜におおわれ, 剝離は比較的容易であった. 腫瘍は尿道と肉眼的に関係は認められなかった. 止血ののちドレーンを挿入し粘膜縫合し手術を終了した.

病理組織学的 所見. 摘出標本は大きさが 3.7×2.3 cm の楕円形を示し, 赤味を帯びた白色を呈し, 弾性硬でもろかった. 肉眼的には悪性を思わせる所見は認めなかった (Fig. 1). 組織学的には腫瘍間質に軽度の

硝子化をともなう不規則に錯走する平滑筋線維束からなり, 周辺部の既存の平滑筋 (写真の下半部) との移行が認められた. 悪性像はなかった (Fig. 2).

術後経過. 術後経過は良好で, 術後 8 日目に留置カテーテルを抜去し術後 11 日目に退院した.

症例 2. 24 歳, 事務員, 未婚.

初 診. 1979 年 11 月 27 日.

主 訴. 外尿道口部腫瘍.

家族歴. 特記すべきことなし.

既往歴. 特記すべきことなし.

現病歴. 1978 年 12 月頃下着に血液付着したことあるもそのまま放置. 1979 年 11 月初旬より帯下の増加があり婦人科受診. 外尿道口部腫瘍を指摘され当科受診をすすめられる. 排尿状態にはまったく異常を認めない. 精査治療目的にて 1979 年 12 月 3 日入院となる.

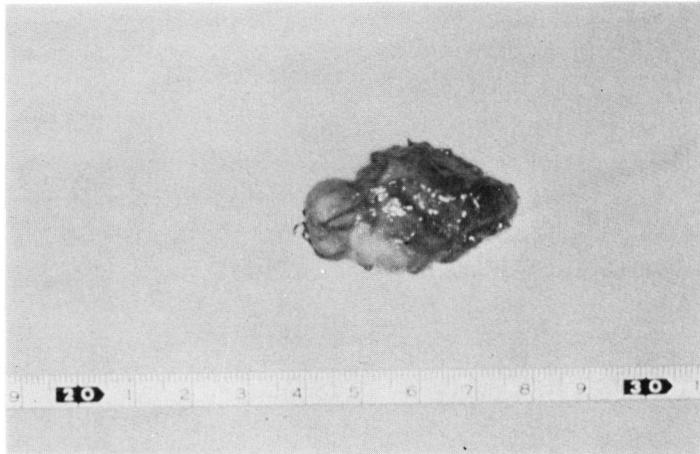


Fig. 1

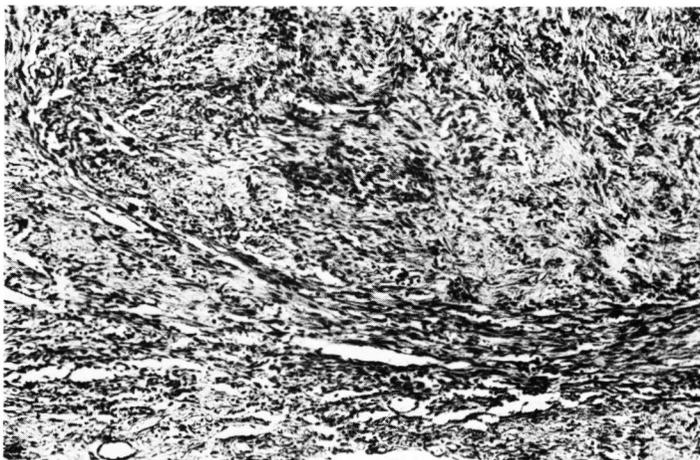


Fig. 2

入院時現症. 体格良. 栄養状態普通. 胸部腹部に異常所見なく一般状態良好である. 局所所見では尿道前壁部にクルミ大の比較的硬い腫瘍が存在し, 桃赤色を呈し, 表面には一部ビランを形成している. 外尿道口は腫瘍により左方へ圧排されているも, カテーテルは外尿道口より容易に挿入可能であった. 両側鼠径リンパ節の腫大は認めなかった.

一般検査成績. 血圧: 100/60 mmHg. 血液所見: 赤血球数 $376 \times 10^4/\text{mm}^3$, 血色素量 11.3 g/dl, ヘマトクリット 37%, 白血球数 $4900/\text{mm}^3$. 血液生化学: 血清総蛋白量 6.2 g/dl, BUN 6.2 mg/dl, クレアチニン 0.9 mg/dl, Na 141 mEq/L, K 5.0 mEq/L, Cl 108 mEq/L, GOT 12 mU/ml, GPT 7 mU/ml. 尿所見: 比重 1.027, pH 6, 糖 (-), 蛋白 (-), 赤血球 (-), 白血球 1~2/每視野, 上皮細胞 3~8/每視野, 円柱

(-), 細菌 (-). 胸部 X 線, 心電図には異常所見を認めない.

内視鏡検査. 尿管口は正常で収縮良好. 粘膜に発赤もなく異常所見は認められなかった.

手術所見. 1979年12月10日腰椎麻酔下に腫瘍摘出術を施行した. 尿道よりバルンカテーテルを留置し, 腫瘍の上方約 2 cm の部位にて約 2 cm の横切開を加え剥離をすすめた. 腫瘍は被膜におおわれており剥離も容易であった. 腫瘍は尿道と肉眼的には交通を認めなかった. 摘出後, 粘膜縫合し手術を終了した.

病理組織学的所見. 摘出標本は大きさが 4.5×3 cm の球形を示し, 桃赤色を呈し弾性硬で充実性であった. 表面には一部ビラン形成を認め同部は黒褐色を呈していた (Fig. 3). 組織学的には膠原線維産生のやや豊富な線維束の不規則な錯走からなる良性線維腫であ



Fig. 3

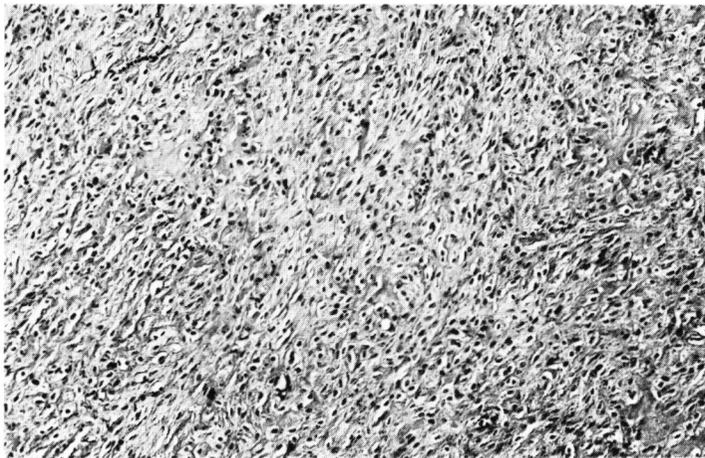


Fig. 4

った (Fig. 4).

術後経過. 術後経過は良好で, 術後7日目に留置カテーテルを抜去した. 尿失禁もなく術後15日目には軽快退院した.

考 察

尿道腫瘍は比較的まれな疾患であるが, 良性腫瘍, 悪性腫瘍ともに女性に多いようである²⁾. 尿道腫瘍は志田³⁾によると病理組織学的につぎのごとくに分類される.

I. 良性尿道腫瘍

- a. 上皮性—良性ポリープ状腫瘍
- b. 非上皮性—線維腫, 筋腫, 血管腫, 囊腫

II. 悪性尿道腫瘍

- c. 上皮性—癌
- d. 非上皮性—肉腫 (黒色肉腫, 円形細胞肉腫, 紡錘細胞肉腫)

このうち非上皮性良性腫瘍の発生数はさほど多くはなく, 囊腫を除く充実性腫瘍はさらに少ない. したがって充実性非上皮性良性尿道腫瘍はまれな疾患と考えられる. 女子尿道腫瘍は尿道後壁, 尿道陰中隔部, 陰前壁に発生した場合は解剖学的な位置より原発部位を判定することが困難であり, その名称もまちまちとなっている. 武本ら¹⁾は手術所見より尿道と関係なく尿道腫瘍は否定されたが内視鏡的には尿道とまったく無関係と断定もできないため傍尿道腫瘍と診断した1例を報告している. われわれの症例も武本ら¹⁾にしたがい傍尿道腫瘍とした.

傍尿道腫瘍の本邦報告例としては, 今回われわれが集計しえた範囲では1916年の池上⁴⁾の第1例目より67症例あり, 自験例2例を含めて69症例である. これら69症例について年齢, 発生部位, 組織像などについてまとめたものを Table 1 に示す. これらについて若干の文献的考察を加える.

年齢分布 (Table 2)—最年少4歳から最年長77歳まで幅広く分布しているが, 表に示すように不明の1例を除き, 20歳代17例 (25%), 30歳代23例 (33.8%), 40歳代15例 (23.5%) であり20歳代から40歳代にかけ55例 (80.9%) と大部分を占めている. 浦田ら⁵⁾は20歳代から40歳代が82.1%, 林正ら⁶⁾は20歳代から30歳代が63.6%, 森岡ら⁷⁾は20歳代から30歳代が58.9%と報告している. 尿道カルンクルスが40歳代以上の中年期以後の女性に多い (百瀬⁸⁾) のに対しやや若年者に多い傾向を示した.

結婚との関係—Table 1 からわかるように, 不明16例を除くと既婚者37例, 未婚者16例と既婚者に多い.

広野ら⁹⁾は既婚者に多かったと報告しているが, 広井ら¹⁰⁾は差がなかったと報告している. 腫瘍の発生が成人に多いことより, その因果関係をすぐに結論することはできない.

受診までの期間—初発の時期より受診するまでの期間をみると, 6カ月以内に受診した症例が22例と最も多く, 1年以上経過して受診した症例が19例あり, 6カ月から1年までの間に受診した症例が9例, 不明19例となっている. 6カ月以内に受診した症例のうち, 排尿痛・尿閉・出血などの排尿状態に異常の認められるものが多く, 一方, 1年以上経過して受診した症例では腫瘤形成を主症状とした症例が多かった.

主訴 (Table 3)—腫瘤形成を主訴としたもの34例 (49.3%), 出血16例 (23.2%), 異和感または不快感7例 (10.1%), 排尿障害11例 (15.9%), 尿線散乱6例 (8.7%), 排尿痛4例 (5.8%) などがある. このうち, 何らかの排尿状態の異常を主症状としたものは22例 (31.9%) であり, 尿道腫瘍の症状としてはあまり排尿異常をきたさないように思われた.

発生部位 (Table 4)—尿道前壁28例 (40.6%), 尿道後壁17例 (24.6%), 尿道陰中隔部6例 (8.7%), 尿道側壁6例 (8.7%), 不明10例である. 浦田ら⁵⁾は前壁40.6%, 後壁23.7%, 側壁10.1%, 中隔部5%と報告し, 広野ら⁹⁾は前壁51.6%, 後壁25.8%, 側壁16.1%, 中隔部6.5%と報告し, ほぼ同じ傾向を示している.

組織学的診断 (Table 5)—平滑筋腫が34例 (49.3%) で最も多く, ついで線維筋腫13例 (18.8%), 線維腫9例 (13%), 血管腫7例 (10.1%) の順となっている. その他, 神経線維腫, 神経鞘腫, 混合腫, 黄色腫などがあった. これも諸家の報告^{5, 6, 11)}と同じ傾向を示した.

組織型と年齢 (Table 6)—50歳未満の症例では58例のうち, 平滑筋腫31例 (53.4%), 線維筋腫12例 (20.7%), 線維腫9例 (15.5%) であり, これに対し50歳以上の症例10例のうち, 血管腫5例 (50%), 平滑筋腫3例 (30%) であった. すなわち, 50歳未満の比較的若年では平滑筋腫と線維筋腫を合わせた筋腫群が43例 (74.1%) と多く, 50歳以上では血管腫が多いという結果であった.

本症の診断についてはカルンクルスを含めた他の尿道腫瘍, 尿道憩室, 尿道脱などとの鑑別が必要であるが, 発生年齢, 腫瘍性状などよりある程度の診断は可能である. しかしながら最終的診断は病理組織学的に下される.

治療法としては腫瘍の摘出術のみを施行した症例が

Table 1. 女子傍尿道良性腫瘍本邦報告例

症例	報告者	発表年	年齢	結婚	分娩回数	受診迄の期間	主訴	発生日	腫瘍性状(形状)	組織型	大きさ(cm)	重量(gm)	転帰	文献
1	池上 五郎	1916	38	不明	不明	1年	不明	右前壁	不正三角形 有茎性	線維筋腫	7×4×3	50	不明	朝鮮医学会誌 16 81~82, 1916
2	吉田 稔	1926	48	既	4	7年	尿道口腫瘍	前壁	縦楕円形 広基性	線維腫	拇指頭大	不明	12日目退院	近畿婦人会誌 9 771~775, 1926
3	斉藤 猛 ほか	1933	28	既	0	1日	放尿時疼痛 軽度月経困難	後壁	表面平滑, 球状	硬性線維腫	2.1×1.5×1.3	不明	14日目退院	近畿婦人会誌16 462~467, 1933
4	佐坂 靖 ほか	1935	22	未	0	1カ月	腔前壁の腫瘤	後壁	卵形, 有茎性 弾性硬, 表面平滑	平滑筋腫	3.3×2.3	14.1	11日目退院	京城医専紀要 5 596~602, 1935
5	西 貞八	1937	49	既	5	9年	排尿困難	前壁	紡錘形, 広基性	線維筋腫	2.2×1.2×1.2	不明	10日目退院	臨床産婦誌 14 474~483, 1937
6	落合京一郎 ほか	1944	25	既	1	約10日	尿道出血, 排尿痛	右側壁	弾性硬, 楕円形, 広基性	血管腫	0.7×1.0	不明	10日目退院	日泌尿会誌 36 188, 1944
7	木村 嘉一	1950	12	未	0	2~3 カ月	尿道脱	不明	軟, 勃起する感あり	海綿状 血管腫	小指頭大	不明	不明	産婦人科の進歩2 143~144, 1950
8	辻 知躬	1951	20	未	0	半日	下腹部痛 血尿, 尿閉	前壁	表面平滑, 浮腫状 有茎性	軟性線維腫	4.2×2.0×1.8	4.5	1カ月半で退院	臨床皮泌 5 236~237, 1951
9	斯波 光生 ほか	1953	29	未	0	5年	外尿道口部腫瘤	右前壁	広基性	線維筋腫	4.2×3.5×2.3	15.2	14日目退院	臨床皮泌 7 408~410, 1953
10	斯波 光生	1955	24	既	不明	6カ月	尿閉	右前壁	小水泡性浮腫を伴う	線維筋腫	拇指頭大	不明	不明	日泌尿会誌 46 668, 1955
11	安藤智恵子 ほか	1956	53	既	6	1カ月半	排尿痛	後壁	軟性	線維筋腫	豌豆大	不明	不明	臨床皮泌 10 1041~1043, 1956
12	金子 栄壽 ほか	1956	不明	不明	不明	不明	不明	不明	筋腫	不明	不明	不明	不明	日泌尿会誌 47 413, 1956
13	大島 升 ほか	1957	31	既	不明	数日	外尿道口腫瘍	前壁 ~左壁	弾性硬, 広基性 表面乾燥角化	線維筋腫	拇指頭大	不明	6日で退院	泌尿紀要 3 296, 1957
14	伏島 茂興	1958	42	既	7	7年	外陰部腫瘤 疼痛並びに出血	後壁	楕円球状 表面に褥創あり	線維筋腫	4.5×3.5×5.0	29	不明	東京慈医大誌73 1692~1693, 1958
15	金子 興一	1958	46	不明	不明	不明	不明	不明	不明	平滑筋腫	クルミ大	不明	3カ月再発なし	日泌尿会誌 49 945, 1958
16	荒木 明節 ほか	1959	24	未	0	4カ月	尿道口部異物感 出血	左前壁	ヒラン, 壊死一部あり	線維腫	1.7×1.0×0.8	不明	7日目退院	皮膚と泌尿 21 155~158, 1959
17	百瀬 俊郎 ほか	1959	4	未	0	不明	不明	不明	不明	線維腫	不明	不明	不明	皮膚と泌尿 21 83, 1959
18	吉岡 晴子 ほか	1959	31	未	0	1年	外陰部腫瘤 帯下感	前壁	球状, 一部乳頭状 懸垂型	線維筋腫	3×2×1.5	不明	不明	産婦人科の実際8 249~251, 1959
19	岩佐 正三	1959	48	不明	不明	不明	不明	不明	不明	線維筋腫	不明	不明	不明	日泌尿会誌 50 621~630, 1959
20	石山 勝蔵 ほか	1960	26	未	0	3年	陰部無痛性腫瘍	前壁	球形, 示指頭大のもの が付着した形	線維筋腫	4.5×2.7×2.5	15	9日目退院	臨床皮泌 14 157~159, 1960
21	百瀬 俊郎	1960	28	不明	不明	不明	不明	不明	不明	平滑筋腫	不明	不明	不明	日泌尿会誌 51 1385, 1960
22	松田 勲 ほか	1961	32	未	0	3~4 カ月	外陰部腫瘤 帯下感	右前壁	有茎性, 球状, 弾性 硬, 一部ヒラン	線維筋腫	3×3×2	不明	11日目退院	産科と婦人科28 437~438, 1961
23	川岸 庇郎 ほか	1961	18	未	0	5年	外尿道口部腫瘍	尿道中 腔	弾性硬	線維筋腫	小鶏卵大	不明	不明	日泌尿会誌 52 725, 1961

24	瀬川 陽一 ほか	1962	26	不明	不明	不明	排尿困難 性交痛, 尿閉	右 壁	一部ビランあり, 有茎性 表面平滑	線 維 腫	3.5×3×3	32	不明	日泌尿会誌 244,	53 1962
25	楠 隆光 ほか	1963	24	既	0	不明	なし	尿 道 腔 中 隔	不 明	平 滑 筋 腫	5×4×3	25	不明	日泌尿会誌 1056,	54 1963
26	武田 裕寿 ほか	1964	33	既	1	7カ月	尿線散乱 外陰部疼痛 (歩行時)	右 側 壁	楕円体	平 滑 筋 腫	3.3×2.9×2.5	13	3カ月 再発なし	癌の臨床 182 ~ 185,	10 1964
27	井上 堯司	1965	44	既	0	不明	外陰部不快感	尿 道 腔 中 隔	表面平滑 弾力性硬	神 經 線 維 腫	クルミ大	不明	10日で退院	日泌尿会誌 906,	56 1965
28	山内秀一郎 ほか	1965	30	既	2	1カ月半	尿道出血	後 壁 (七時)	長円形, 表面平滑 弾性軟, 有茎性	線 維 筋 腫	3.2×1.4	3.8	13日目で 内科転科	皮膚と泌尿 464 ~ 468,	28 1965
29	国島起嗣夫 ほか	1966	32	既	不明	1年	尿線散乱 排尿困難	前 壁	有茎性, 表面平滑 中心部乳頭状	神 經 鞘 腫	3×2.5×2	10	5年再発なし	癌の臨床 101 ~ 102,	12 1966
30	"	"	38	既	2	10日 5日前 中絶	外尿道口腫瘍	前 壁	楕円形, 表面平滑 頂点部乳頭状	神 經 線 維 腫	2×1×1	4	2年6カ月 再発なし	"	"
31	安藤 弘 ほか	1968	25	既	0	3日 妊娠 3カ月	尿線散乱 外陰部腫瘍	左 側 壁	扁平, 楕円形, 有茎性 表面平滑	線 維 腫	2.5×2.3×1.5	8	不明	日泌尿会誌 84,	59 1968
32	豊田 泰 ほか	1969	38	既	不明	不明	残尿感, 排尿後 下腹部不快感	外尿道口	不 明	混合腫瘍 腺腫+乳頭腫 腺腫+軟肉腫	小指頭大	不明	9カ月 再発なし	日泌尿会誌 171,	60 1969
33	藤田 幸雄	1969	47	不明	不明	不明	尿道不快感	外尿道口	不 明	平 滑 筋 腫	不明	不明	不明	日泌尿会誌 264,	60 1969
34	山本 厳 ほか	1969	58	既	不明	3年	尿道出血	前 壁	弾力性軽, 無茎	血 管 腫	豌豆大	不明	不明	日泌尿会誌 815,	60 1969
35	広井 康秀 ほか	1969	21	未	0	3カ月	排尿困難 歩行時疼痛, 出血	前 壁	軽度凹凸不整 一部ビラン~潰瘍形成	平 滑 筋 腫	5×4×3.5	28	15カ月 再発なし	臨泌 57~60,	23 1969
36	扇本 全 ほか	1970	32	既	2	2年	外陰部腫瘍 腫瘍よりの出血	前 壁	表面平滑 一部乳頭状	平 滑 筋 腫	鶏卵大	不明	不明	日泌尿会誌 86,	61 1970
37	浅野美智雄 ほか	1970	41	既	4	3カ月 (妊娠中)	尿道下部腫瘍	後 壁	球形, 弾力硬	平 滑 筋 腫	4.5×4.0×3	30	14日で退院	臨泌 69~71,	24 1970
38	鶴見 和弘 ほか	1971	63	不明	不明	不明	不明	尿 道 腔 中 隔	不 明	黄 色 腫	不明	不明	不明	日泌尿会誌 733,	62 1971
39	広野 晴彦 ほか	1971	38	既	0	1年	外尿道口部 無痛性腫瘍	後 壁	広基性, 表面平滑	平 滑 筋 腫	3.3×2.4×1.9	7.5	14日正常	臨泌 563 ~ 569,	25 1971
40	武本 征人 ほか	1972	32	既	0	2年	尿道部無痛性腫瘍 尿線の乱れ	腔 前 壁	球形, 表面平滑 有茎性	平 滑 筋 腫	4.0×3.0×2.8	19.6	10日目退院	泌尿紀要, 847 ~ 850,	18 1972
41	斯波 光生 ほか	1972	33	既	1	5年	出 血	左 後 壁	楕円形, 弾力硬	平 滑 筋 腫	5×3×2	23	12日で退院	臨泌 977 ~ 980,	26 1972
42	"	"	34	既	3	6カ月	腔前壁腫瘍	左 前 壁	平滑	平 滑 筋 腫	8.4×4.5×5.0	95	14日で退院	"	"
43	木下 英親 ほか	1973	21	未	0	2年	外尿道口部無痛性 腫瘍	前 壁	楕円形 表面一部乳頭状	平 滑 筋 腫	3×2×2	不明	不明	日泌尿会誌 601,	64 1973
44	山田 智二 ほか	1973	68	不明	不明	6カ月	尿道出血 排尿困難	前 壁	表面一部出血 有茎性, 弾性軟	線維性血管腫	1.5×1.0×1.0	1.5	不明	日泌尿会誌 861,	64 1973
45	山田 智二 ほか	1974	73	不明	不明	不明	尿道出血	後 壁	表面一部出血 有茎性, 弾性軟	血 管 腫	1.5×1.2×0.7	1.5	不明	日泌尿会誌 537,	65 1974
46	鳥村 昭吾	1974	30	既	1	3年 妊娠 3カ月	尿道腫瘍	前 壁	有茎性, 一部乳頭状 楕円体形	平 滑 筋 腫	2.0×2.8×1.6	3.4	不明	日泌尿会誌 539,	65 1974

47	平賀 聖悟 ほか	1975	35	既	不明	3年 (妊娠中)	外陰部腫瘍, 出血	前 壁	楕円形, 弾性硬, 白色 米粒大乳 嚢状突起あり	平滑筋腫	3.5×2.5×3	7.1	不明	日泌尿会誌 128,	66 1975	
48	西田 勉 ほか	1975	42	不明	不明	不明	不明	不明	不明	平滑筋腫	不明	不明	不明	不明	日泌尿会誌 174,	66 1975
49	〃	1975	43	不明	不明	不明	不明	不明	不明	平滑筋腫	不明	不明	不明	不明	〃	
50	〃	1975	43	不明	不明	不明	不明	不明	不明	平滑筋腫	不明	不明	不明	不明	〃	
51	河村 毅	1975	31	未	0	不明	排尿困難 排尿時膿性帯下	尿道腔 中隔	表面平滑, 弾性硬	平滑筋腫	9.5×7.4×4.0	240	不明	日泌尿会誌 210,	66 1975	
52	多嘉良 稔 ほか	1975	42	既	不明	4~5 ヵ月	無痛性腫瘍	後 壁	表面平滑, 弾性軟	平滑筋腫	指頭大	不明	不明	不明	日泌尿会誌 277,	66 1975
53	多嘉良 稔 ほか	1975	31	既	不明	10ヵ月	排尿困難 外尿道口無痛性腫瘍	前 壁	有茎性	平滑筋腫	指頭大	不明	不明	不明	日泌尿会誌 277,	66 1975
54	小坂 信生	1975	64	不明	不明	不明	尿道出血	後 壁	有茎性	海綿状 血管腫	1.4×1.1×1.0	不明	不明	不明	日泌尿会誌 292,	66 1975
55	清原 久和 ほか	1975	25	未	0	3年	外尿道口腫瘍形成	右側壁	卵型, 弾性硬 表面平滑	平滑筋腫	3.0×2.5×2.0	12	不明	不明	日泌尿会誌 523	66 1975
56	津村 芳雄 ほか	1976	46	既	不明	6年	外尿道口部腫瘍 尿道出血	前 壁	広基性, 弾性硬	平滑筋腫	小指頭大	不明	不明	不明	日泌尿会誌 208,	67 1976
57	加藤 義明	1976	65	既	不明	3ヵ月	尿道出血 尿線の乱れ	後 壁	表面平滑, 有茎性 弾性硬	海綿状 血管腫	0.8×0.7×0.6	1	4ヵ月 再発なし	不明	日泌尿会誌 576,	67 1976
58	三好 進 ほか	1976	44	既	不明	3年半	排尿困難 外陰部腫瘍形成	腔前壁 ~腔前壁	表面平滑, 弾性硬	線 維 腫	3×4×5	55	1年6ヵ月 再発なし	西日泌尿 741~746,	38 1976	
59	〃	1976	34	既	不明	7日	排尿終末痛	後 壁	表面は乳頭状 一部ビラン形成	平滑筋腫	1.5×1.0×2	4	10日目退院	〃		
60	森岡 政明 ほか	1976	32	既	不明	7日	外陰部腫瘍	前 壁	表面平滑, 弾性硬	平滑筋腫	3.7×3.0×1.8	10	13日目退院	臨泌 883~886,	30 1976	
61	奥村 良二 ほか	1977	33	既	不明	9ヵ月	外尿道口部腫瘍	前 壁	卵円形, 弾性硬 表面平滑	平滑筋腫	3×1.5×1.5	4.6	不明	不明	日泌尿会誌 511,	68 1977
62	〃	〃	77	不明	不明	1ヵ月	外尿道口部腫瘍	左前壁	卵円形, 表面平滑 一部ビランあり	平滑筋腫	2×1.5×1.5	4.2	不明	〃		
63	上原 徹 ほか	1977	20	未	0	不明	外陰部腫瘍	前 壁	楕円形, 表面平滑, 弾性硬, 部分的に嚢状	平滑筋腫	2.0×1.5×1.3	2.1	不明	不明	日泌尿会誌 993,	68 1977
64	神田	1978	53	不明	不明	不明	外陰部腫瘍 排尿困難		小豆大~大豆大, 多発性	平滑筋腫	不明	28	不明	不明	第85回, 日本泌尿器科 学会関西地方会	
65	林正 健二 ほか	1979	32	既	不明	8年 3ヵ月	外陰部腫瘍	尿道後壁 ~腔前壁	有茎性, 弾性硬 表面一部ビラン	平滑筋腫 チュウレット 嚢腫をもつ	5.5×4.2×6	67	10日目退院	泌尿紀要 495~498,	25 1979	
66	瀧原 博史 ほか	1979	34	既	不明	5年	外陰部腫瘍	右側壁	表面平滑, 楕円形, 弾性硬 ビラン, 潰瘍なし	平滑筋腫	4.5×3.5×3.0	22	3ヵ月 再発なし	不明	臨泌 1017~1019,	33 1979
67	浦田 英男 ほか	1979	42	既	不明	3年	外尿道口部無痛性腫瘍 尿線の乱れ	後 壁	表面平滑, 弾性軟	平滑筋腫	4.3×3.2×3.0	18	15日目退院	泌尿紀要 1061~1068,	25 1979	
68	自 験 例	1980	53	既	2	2~3年	外陰部出血	尿道腔 中隔	弾性硬, 楕円形	平滑筋腫	3.7×2.3		11日目退院			
69	自 験 例	1980	24	未	0	1年	外尿道口部腫瘍	前 壁	弾性硬 表面一部ビランあり	線 維 腫	4.5×3		15日目退院			

Table 2. Age distribution

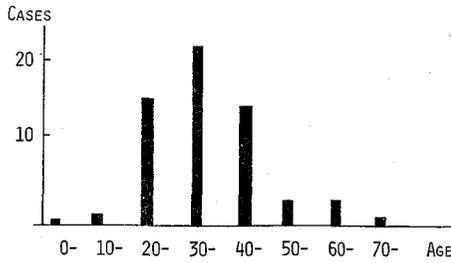


Table 3. Symptom

TUMOR	34
BLEEDING	16
DISCOMFORT	7
PAIN	4
MICTURITION PAIN	4
DYSURIA	11
RESIDUAL FEELING	1
DISTURBANCE OF URINARY STREAM	6
UNKNOWN	10

Table 4. Location

Ant. wall	28
Post. wall	17
Lat. wall	6
Ureth. vag. sep.	6
Ext. ureth. orf.	2
Unknown	10

Table 5. Pathological diagnosis

Fibromyoma	13
Leiomyoma	34
Myoma	1
Fibroma	9
Angioma	7
Neurofibroma	2
Schwannoma	1
Mixed tumor	1
Xanthoma	1

Table 6. Relation between age and histology

HISTOLOGY	Age	0 ~ 9	10 ~ 19	20 ~ 29	30 ~ 39	40 ~ 49	50 ~ 59	60 ~ 69	70 ~	UNKNOWN
FIBROMYOMA			1	3	5	3	1			
LEIOMYOMA				7	15	9	2		1	
MYOMA										1
FIBROMA		1		6		2				
ANGIOMA			1	1			1	3	1	
NEUROFIBROMA					1	1				
SCHWANNOMA					1					
MIXED TUMOR					1					
XANTHOMA								1		

ほとんどである。

また、本症の予後は良好といわれている。

結 語

53歳主婦と24歳未婚女性に発生した傍尿道腫瘍の2例を報告し、若干の文献的考察を加えた。なお、自験例は本邦文献上、平滑筋腫の第34例目および線維腫の第9例目であった。

稿を終えるにあたり、病理組織学的診断につき御教示を賜った永岡貞男博士に深謝いたします。本論文の要旨は1980年3月13日開催された第393回日本泌尿器科学会東京地方会において発表した。

文 献

- 1) 武本征人・高羽 津：女子傍尿道腫瘍の1例。泌尿紀要，18：847～850，1972。

- 2) 田村 一：日本泌尿器科全書。5巻，474～479，金原出版・南江堂，東京，1960.
- 3) 志田圭三：陰茎および尿道の腫瘍，臨床皮泌，**10**：969～977，1956.
- 4) 池上五郎：女子尿道壁ヨリ発生セル鶏卵大纖維筋腫ニ就テ。朝鮮医会誌，**16**：81～82，1916.
- 5) 浦田英男・加藤広海・山崎義久・多田 茂：女子傍尿道腫瘍の1例。泌尿紀要，**25**：1061～1068，1979.
- 6) 林正健二・松田公志：女子傍尿道平滑筋腫の1例。泌尿紀要，**25**：495～498，1979.
- 7) 森岡政明・荒木 徹：女子傍尿道平滑筋腫の1例。臨泌，**30**：883～886，1976.
- 8) 百瀬剛一：尿道小阜。日泌尿会誌，**49**：1034～1041，1958.
- 9) 広野晴彦・能美 稔・高橋 厚・中神義三・陳泮水・淡輪邦夫：女子尿道平滑筋腫の1例。臨泌，**25**：563～569，1971.
- 10) 広井康秀・稲垣 侑：女子外尿道口より発生せる平滑筋腫の1例。臨泌，**23**：57～60，1969.
- 11) 三好 進・郡健二郎・永原 篤：女子傍尿道腫瘍の2例。西日泌尿，**38**：741～746，1976.

(1980年5月6日受付)